

この本、
いかがですか？

“ルーチンケアや 新たな課題への再考を促す 1 冊”

評者

福井トシ子

日本看護協会会長

コ クランは、「1992年に設立され、25年を超える歴史をもつ組織」であり、その核になる考え方である「根拠に基づく医療」は、「近年の医療分野の十大発明にも数えられて」（本書 p.iii、「はじめに」より）いるという。そのような情報源をベースとして書かれた、本書のような存在を待っていた周産期医療関係者、特に助産師は少なくないと思う。どの章もたいへん興味深く、参考になる。ここでは、出産時のケア、ルーチンに焦点を当てて、紹介してみたいと思う。

「出産に関するさまざまなルーチン」の中で、剃毛や浣腸は「妊産婦の心理的負荷は大きい」が、明らかなメリットはない」と記載され、著者は「日本においても、近年では『ルーチンでの剃毛や浣腸はせず、必要に応じて行う』という方針の産婦人科が増えている」と述べている（p.56）。

1990年以前、わが国の分娩周辺は、分娩時の導尿や浣腸がルーチンケアと称され、当たり前に行なわれていた。産婦が入院すると、医師は分娩監視装置装着、浣腸、導尿、剃毛というスタンプを押して入院指示をするところもあったと聞く。助産の教科書にも、初経産別に分娩時に浣腸を行なう時期が記載されていた。

1995年4月、前WHOヨーロッパ地域事務局女性と子どもの健康部長（当時）のマースデン・ワグナー氏が、『助産婦雑誌』において「手

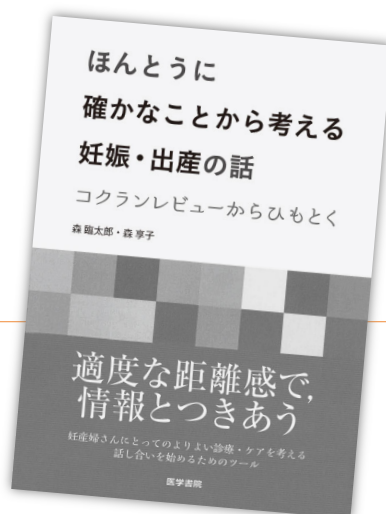
術と見なされる出産」と題して、医師が剃毛、浣腸、会陰切開をする理由を述べている¹⁾。その中で、「妊娠は疾病ではない。ところが医師は、診断と治療を頻繁に要する重い病気であるかのように妊娠を管理していくのである。出産は外科的処置を要するものでもない」と、出産が手術と見なされている状況を指摘し、WHOの調査からこうしたルーチンワークが不要であるとしている。

また、2003年10月、第106回関東連合産婦人科学会学術集会において、石井廣重氏ら（石井第一産科婦人科クリニック）が、「WHO 59カ条による医療介入の少ないお産を目指して」という講演の中で、「今や如何にローリスク妊婦に、快適で安全なお産を提供することにわれわれは重きを置かなかったか、と反省する時期に来ているのではないのでしょうか。（中略）WHOの59カ条にしたがって『如何に安全に医療介入のないお産を達成するか』を日常診療の目標としております。BFH（赤ちゃんにやさしい病院）に認定されてからの当院の分娩形態を報告し、どうしたらローリスクのお産を医療介入なしで終わることができるかを考えてみたいと思います」と述べている²⁾。

分娩時のルーチンケアとしての導尿や浣腸が不要と論じられてから、すでに20年。本書で紹介されているレビューは、剃毛は2014年、浣腸は2013年に更新されたものである。本書

ほんとうに確かなことから考える
妊娠・出産の話
コクランレビューからひもとく

森臨太郎／森享子 著
本体 2200 円＋税
A5 判／医学書院／2018 年



が、すべての分娩施設において、ルーチンの剃毛や浣腸は不要という方針にかじを切り、加速するためのパワーとなることを期待したい。

本書はコクランレビューをテーマ別に分類し掲載しているだけではなく、その後にまとめられた著者の解説が明快である。レビューを効果的に活用するための示唆を与えてくれる。“よい”と思われるケアをする時に、どのようなしくみや構造が必要なのかを想起することもできるし、その解説から、新たなリサーチクエスションを得ることもできる。ぜひ、活用したい1冊である。

【参考文献】

- 1) マースデン・ワグナー：藤原美幸訳：手術とみなされる出産一医師が剃毛、浣腸、会陰切開をする理由。助産婦雑誌，49(4)：293-297，1995.
- 2) 石井廣重，ほか：WHO 59 カ条による医療介入の少ないお産を目指して。日本産科婦人科学会関東連合地方部会会報，40(3)：368，2003.
https://jsog-k.jp/journal/lfx-journal_detail-id-16814.htm [2018.06.19 アクセス]